

## 日本特殊教育学会第55回大会参加報告

大内 進  
(研究企画部)

**要旨：**日本特殊教育学会第55回大会の概要並びに同大会における筆者が運営に携わった自主シンポジウムについて報告する。本大会は、平成29年9月16日(土)～18日(月)の3日間、名古屋市の名古屋国際会議場で開催された。「特別支援教育：これまでとこれからの10年」を大会メインテーマとして、「学会企画講演・シンポジウム・ワークショップ(7演題)」、「準備委員会企画 記念講演・シンポジウム(6演題)」、「ポスター発表(570演題)」、「口頭発表(52演題)」、「自主シンポジウム(126演題)」の学術行事が企画、実施された。本大会には、42名の本研究所スタッフも、学会企画シンポジウムの話題提供者、自主シンポジウムの企画者・話題提供者・指定討論者、及びポスター発表の筆頭及び連名発表者として、研究成果の普及、情報収集等に努めた。筆者が参加した自主シンポジウム5-480「インクルーシブ教育システムを支える特別支援学校と小・中学校の連携を巡って」では、特別支援学校のセンター的機能について、特別支援学校と小・中学校の望ましい連携のあり方を探った。小学校の特別支援教育コーディネーターを対象として実施した調査研究の成果を踏まえて、支援を受けている小学校がセンター的機能をどのように受け止めているかを把握することにより、相互の連携のあり方の改善の方向性を示そうとするものである。小・中学校が主体的に取り組む仕組みづくりが必要であることが確認された。

**見出し語：**日本特殊教育学会、大会報告、自主シンポジウム、センター的機能

### I. 大会の概要

日本特殊教育学会第55回大会は、平成29年9月16日(土)～18日(月)の3日間にわたって、愛知教育大学の主管により、名古屋市熱田区にある名古屋国際会議場で開催された。本大会のメインテーマは、「特別支援教育：これまでとこれからの10年」であった。共生社会を目指し、インクルーシブな教育体制の構築に向けて『特別支援教育』が動き出して10年が経過した。この節目である10年を機会に、これまでの成果や課題を振り返り、そしてこれからの10年の展望を切り開こうというのがテーマの趣旨である。準備委員会主催の企画では、この「振り返りと展望」を大切にしたいシンポジウム等が用意された。大会記念講演は杉山登志郎氏(浜松医科大学)と滝川一廣氏(学習院大学)のお二人から「発達障害者のそだち—教育・医療・社会」と題して講演及び座談会があった。その内容は、これまでの障害児教育や医療、

そしてそれを取り巻く社会のあり方を振り返ったものであった。

### II. 大会期間中の主なスケジュール

大会初日の9月16日(土)は、学会企画社会貢献小委員会シンポジウム、学会企画和文誌編集委員会ワークショップ、口頭発表19件、自主シンポジウム36件、ポスター発表163件が行われた。

2日目の9月17日(日)は、記念講演4件、学会企画受賞者講演(研究奨励賞・実践研究賞)、学会企画国際化推進委員会シンポジウム、準備委員会企画シンポジウム、学会企画熊本地震支援助成ワークショップ、口頭発表20件、自主シンポジウム54件、ポスター発表244件が行われた。

3日目の9月18日(月)は、学会企画研究委員会

シンポジウム，準備委員会企画シンポジウム，学会企画実践研究助成事業ワークショップ，口頭発表13件，自主シンポジウム36件，ポスター発表163件が行われた。以上の3日間の日程をまとめると表1の通りとなる（いずれも大会プログラムより集計・整理を行った）。

**表1 日本特殊教育学会第55回大会の3日間の主なスケジュール**

主な時間帯	9月16日 (土)	9月17日 (日)	9月18日 (月)
午前 1日目 10:00～12:00 2日目・3日目 9:30～11:30		<ul style="list-style-type: none"> <li>・記念講演①</li> <li>・学会企画受賞者講演（研究奨励賞・実践研究賞）</li> <li>・準備委員会企画シンポジウム</li> <li>・口頭発表7件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表81件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会企画研究委員会シンポジウム</li> <li>・準備委員会企画シンポジウム</li> <li>・口頭発表7件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表81件</li> </ul>
午後1 1日目 13:00～15:00 2日目・3日目 12:30～14:30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会企画社会貢献小委員会シンポジウム</li> <li>・準備委員会企画シンポジウム</li> <li>・口頭発表6件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表82件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記念講演②</li> <li>・学会企画国際化推進委員会シンポジウム</li> <li>・口頭発表7件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表82件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会企画実践研究助成事業WS</li> <li>・口頭発表6件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表82件</li> </ul>
午後2 1日目 15:30～17:30 2日目・3日目 15:00～17:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会企画和文誌編集委員会ワークショップ</li> <li>・口頭発表13件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表81件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記念講演③</li> <li>・学会企画熊本地震支援助成ワークショップ</li> <li>・口頭発表6件</li> <li>・自主シンポジウム18件</li> <li>・ポスター発表81件</li> </ul>	

### Ⅲ. 特総研研究スタッフの活動の概要

本大会には，多数の特総研研究スタッフも発表エントリーを行い，シンポジウムにおける話題提供者や協議のファシリテーターとして，また，ポスター発表者として研究成果の普及をはじめ，現在，研究を進めている各種の専門分野に関する情報収集や研

究者間のネットワークづくり等に努めた。

3日間にわたる特総研研究スタッフの活動の概要は以下の表2に示す通りである（いずれも大会プログラムより集計・整理を行った）。

自主シンポジウムでは，4名が企画者となり特別支援教育推進上の諸課題等について問題提起や協議の場を企画し，様々な議論を促進した。また，今年度は10名のスタッフが指定討論者として参画した。

ポスター発表では，のべ123名（重複して連名登録している場合も1名とカウントした）が発表エントリーを行い，前年度までに終了した専門研究の研究成果や障害種別研究班による調査研究，科学研究費補助金による研究等の研究成果を報告した。実際に特総研研究スタッフが関与するポスターの発表件数は，合計で28本となっていた。

### Ⅳ. 自主シンポジウム5-4 インクルーシブ教育システムを支える特別支援学校と小・中学校の連携を巡って

本シンポジウムは，日本リハビリテーション連携科学学会研究推進委員会の下部研究会である「教育支援研究会」の取組として実施されたものである。筆者が，企画者・司会者として参画した。以下にその概要を報告する。

企画・司会者 大内 進（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所），話題提供者1 後藤貴久（東京都立青島特別支援学校），話題提供者2 清水 聡（筑波大学附属桐が丘特別支援学校），話題提供者3 山中ともえ（調布市立飛田給小学校），指定討論者 香川邦生（教育支援研究会）

#### 1. 企画主旨

我が国における障害児教育は，平成19年度から「特別支援教育」へと移行した。「特別支援教育」の理念は，教育の場の如何に関わらず，障害がある子どもに対して，障害に基づく特別な教育的ニーズに対応した支援を行うことのできる体制を整備しようとするところにある。特に従来の「特殊教育」の制度下における対応と異なる点は，小・中学校等の通常の学級に在籍している障害のある児童生徒に対しても，

障害等による特別なニーズに対応した支援を行うことのできる体制の整備を図っていこうとするところにあるといえる。小・中学校の通常の学級に在籍している児童生徒に対して、個別の教育的ニーズに応じた支援を行っていくためには、従来とは異なる様々な工夫が必要であるが、その一つの対応策として重視されているのが、特別支援学校のセンター的機能を活用した小・中学校との連携である。この自主セミナーにおいては、この点に視点を当て、現在どのような形で特別支援学校から、小・中学校へ支援が行われているか、これらの支援は小・中学校側から見てどのような評価を受けているのか、調査研究の結果を踏まえて今後に残された課題や改善すべき点は何かを探っていこうとするものである。

「教育支援研究会」の平成27年度の調査からは、特別支援学校のセンター的機能（特別支援学校が、地域の小学校等に在籍する障害のある児童等に対して、要請に応じて必要な支援を行う機能）が、普及し活用されていることが明らかになった。他方、小・中学校にとって特別支援学校のセンター的機能がどの程度有効に作用しているかに関しては、全容が明確に把握されているとはいえない状況にあることも判明した。そこで平成28年度においては、小学校で特別支援教育コーディネーターの役割を担っている教員を対象として、特別支援学校のセンター的機能がどの程度役に立っていると考えられているか、支援を受けている側である小学校からみた評価の状況を把握するために、東京都内の特別支援学級を設置している小学校の特別支援教育コーディネーターを対象に、特別支援学校のセンター的機能の実態と評価に関する質問紙による調査を実施した。本シンポジウムではその研究成果を報告するとともに、今後の取組の方向性について議論した。

## 2. 本シンポジウムの中核をなす研究について

研究の目的：小学校で特別支援教育コーディネーターの役割を担っている教員が、特別支援学校のセンター的機能がどの程度役に立っていると考えているか、その状況を把握する。

### ○研究の方法

#### 1) 調査対象と方法

東京都内で特別支援学級を設置している小学校443校の特別支援教育コーディネーターを対象に、質問紙による調査を実施した。調査用紙は特別支援学級設置学校長協会の協力を得て各学校に送付した。

#### 2) 調査期間

調査期間は、2016年10月1日から10月31日の1か月間。

#### 3) 調査項目

回答者の勤務校の基本データ、勤務校における特別支援学校からの支援の状況、これまでに受けた支援の有効性に関する回答者の評価、特別支援学校からの支援に期待する事項について回答を求めた。

#### 4) 調査の回収率

調査の発送と回答の回収は、東京都特別支援学校設置学校長協会の全面的な協力を得て実施された。263校から回答があった。回収率は59.4%であった

### 3. 話題提供 1

話題提供1では、都内小学校における支援の実態と評価の概要に報告がなされた。内容は、(1)特別支援学校からの支援の状況、(2)これまでに特別支援学校から受けた支援の状況、(3)これまでに特別支援学校から受けた支援の有効性、(4)支援を受けていない学校について、(5)まとめと今後の展望であった。

### 4. 話題提供 2

話題提供2では、都内小学校における特別支援学校のセンター的機能の評価—今後に期待される支援の内容—と題して報告があった。小学校側から見みた特別支援学校のセンター的機能に対する今後の期待について把握することを目的として、「今後に期待される支援内容」に関する自由記述の内容を分析したものであった。

### 5. 話題提供 3

話題提供3では、小・中学校からみた新学習指導要領への対応として、新学習指導要領における小・

中学校の特別支援教育の充実に向けた課題が報告された。

## 6. 指定討論

### 1) 話題提供者の発表を聞いた感想

話題提供者の発表から幾つかの具体的問題点が浮き彫りにされたが、その中で印象に残ったのは次の5点である。

- ① 特別支援教育に関する啓蒙の時期であるが、これに対する対応はかなり行われている。
- ② 小・中学校に在籍する障害児を集めて、年に何回か活動を共にする行事を行っている特別支援学校は、4割程度と少ない。こうした活動を共にする行事の意義をもう少し見直す必要があるのではないか。
- ③ 巡回指導の要望が強いが、その対応はできないか。すでに実施している特別支援学校も幾つか存在する。
- ④ センターの機能による小・中学校の支援に関して、妥当な評価方法を開発する必要があるのではないか。
- ⑤ 今後は、通常の学級で学習する障害のある児童生徒に対する具体的指導の方法論のアドバイスが大きな課題となる。この課題を解決するためには、特別支援学校側と小・中学校側との共同研究が大切であろう。つまり、授業のユニバーサルデザイン開発が求められているといえる。

### 2) ユニバーサルデザイン充実のために

授業のユニバーサルデザイン開発を推進していくための観点としては次のような諸点が考えられる。

- ① 効果的な授業を進めるための教材・教具の開発が必要であること。
- ② 授業のユニバーサルデザインにふさわしい指導法の研究・開発が必要であること。
- ③ 教員等の指導者の数的確保が重要であること。
- ④ 児童生徒同士の好ましい関係構築による授業づくりが大切であること。

## 7. 参加者との討議から

本シンポジウムの参加者からは次のような質問や

意見が寄せられ、活発な討議がなされた。

- ① 合理的配慮についてアイデア等を提案していくことが大事ではないか。
- ② 障害理解の推進が必要と示されたが、これは個人因子としての障害理解なのか。環境が障害を作り出しているというICFの障害観にたつて、障害観の理解推進の方が良いと思うが。
- ③ 特別支援学校が一方向的に支えるのではなく、小・中学校が組織として受け止めることが大切。共同で授業研究などに取り組みされている例はあるか。
- ④ 支援に出向いている経験から、喜ばれるのは具体的な教材等の提示。支援する側からすると教材・教具は手段であり、自立活動の組み立てやプロセスを大事にしたいが、先方の満足度が低くなってしまふ。そこで、すぐに役に立つ支援も提案するようにしているもののバランスをとるのが難しい。
- ⑤ 就学手続きの流れが変わり、特別支援学校相当と判断されている子どもが地域の小・中学校に入っており、相談ニーズとしてトピックになっている。実態に応じた目標とか学習内容の設定から適切な指導、評価等のニーズはあったか。

## V. まとめ

日本特殊教育学会第55回大会の概要並びに同大会における筆者が運営に携わった自主シンポジウムについて報告した。特総研として、自主シンポジウムでは4名が企画者となり特別支援教育推進上の諸課題等について問題提起や協議の場を企画し、様々な議論を促進した。この他、今年度は10名のスタッフが指定討論者として参画した。ポスター発表では、のべ123名であった。前年度までに終了した専門研究の研究成果や障害種別研究班による調査研究、科学研究費補助金による研究等の研究成果を報告しており、実際に特総研研究スタッフが関与するポスターの発表件数は、合計で28本となっていた。

### 参考文献

日本特殊教育学会第55回大会論文集